

39 国立公文書館内閣文庫所蔵の脈書『診脈要捷』について

吉岡 広 記

日本鍼灸研究会

一、内閣文庫所蔵の脈書『診脈要捷』

『診脈要捷』一巻一冊（函架番号一—三〇三一六九、日本四つ目鍼眼原装、紙高二六一耗、紙幅一八一耗、蔵印記「江戸医学／蔵書之記」「多紀氏／蔵書印」「二種」は、その外題（「診脈要捷 原名脈粹」と墨書）と姚誼の序（治平三年）および李撰の跋（嘉定癸未）より宋・蕭世基の『脈粹』であることが知れる。また、成書年は姚誼の序が書かれた一〇六六年をもってその年とする。書末に「永正十五年戊寅三月七日、申剋写之畢」とあり、続いて「天保壬寅正月、小島氏宝素尠蔵本借鈔、堅識」と朱書されていることから、多紀元堅が小島宝素より借りて鈔写したものとわかる。『脈粹』は、台湾故宮博物院に（重鈔）日本永正十五年鈔本が

二本あるほか、中国中医研究院にも同鈔本と思しき一本が確認される（『全国中医圖書聯合目錄』）。故宮所蔵本のうち、楊守敬の手書識語のある一本が台湾・新文豊出版公司より影印出版されている。本書は、蔵印記「小島氏／圖書記」が辛うじて判読でき、また真柳誠氏の報告（「診法之属（上）」『漢方の臨床』五〇巻七号）からも『経籍訪古志』の云う宝素堂旧蔵の影永正鈔本であることは明らかであり、内閣文庫所蔵の多紀元堅手跋本はその模写であることがわかる。

蕭世基および『脈粹』の詳細は不明であるが、序跋と『郡齋讀書後志』より、世基は河南の人で字を処厚と言ひ、『内経』をはじめ歴代の医書を閲読し、曖昧で理解しにくいことを憂い、善い所を集めて本書を著したことが伺える。また、南宋代に王進甫が王叔和の『脈賦』（本書は、管見では明代の熊宗立「勿聽子俗解脈訣」、張世賢「図註脈訣」や叢書である『医要集覽』、内閣文庫所蔵の『医書八種』、清の『古今圖書集成』）に見えるのみで、宋・元代の目録および医書には未見と合刻する際に『診脈要捷』と改題したことが知れる

が、伝本はことごとく『脈粹』のみで構成される。

二、内容

全二十七篇からなり、概ね歌訣の形式を採り、最後の二篇（聴声驗病訣、察色并死入神訣）を除けば、書名の通り脈診に関する内容となっている。左右寸関尺の藏府配当をはじめ、男女の常脈、四時五藏の脈、妊娠や胎児の男女の弁別、予後判定、小児の虎口三関脈診など多岐にわたっており、その中核をなすのは、第十一篇の弁七表八裏脈形状左右主病法である。篇名からもわかるように、『脈経』『千金方』などの隋唐期までに見える「相類」や「相對」という主要な脈状分類ではなく、宋代以降に盛行した『王叔和脈訣』より始まる「七表八裏九道」を採用する。ただし、九道という名称は見えず（『脈訣』を除けば『脈粹』にやや遅れる劉元賓『通真子補注脈訣』がその初出となる。敦煌出土の『七表八裏三部脈』にも見えず、九道という名称の成立は北宋代ということも考えられ、検討を要す）、それに相当する脈状は長・短十七死脈＋虚・牢・促・結・代＋革（原本は誤って草に作る）＋細・動の順に

置かれ、全三十二脈状となっている。その脈證は、七表脈のうち浮・朮が左右寸関尺各部、残り五脈と八裏脈が寸関尺、その他が脈の主病という形で記載され、左右寸関尺診を一部採用する。この診法は、『太平聖恵方』（浮・朮の二脈のみ）より始まり、『脈粹』の影響下に南宋の『察病指南』（七表八裏脈のみ）で展開され、元の『診家枢要』（七表八裏脈に相当する脈状）で一応の完成を見る。洪脈を除く七表脈には脈図が付されるが、脈状の図式化の試みは本書をもって嚆矢とする。『察病指南』では八裏九道および七死脈も加え全脈状に脈図が描かれ、また『脈経』の一部の版本にも見えるなど、その影響は大きい。

本書は、①脈図の創始、②『脈訣』以来の七表八裏（九道）脈の採用、③従来の寸口診や寸関尺診から左右寸関尺診への移行という三点において、北宋より生じた脈診の新たな展開の一翼を担った大きな意義を持つ脈書であり、その成果は『察病指南』に継承される。